

中級レベル学習者と上級レベル学習者の 発話に対する評価

- 日本語母語話者評価の因果関係モデル -

崔文姫*

(e-mail: cmoonhee@gmail.com)

目次

1. はじめに	4. 分析結果
2. 先行研究	4.1 因子分析
3. 方法	4.2 共分散構造分析用項目
3.1 日本語学習者および評価材料	4.3 共分散構造分析用項目の平均値 および t 検定
3.2 調査対象者（評価者）および 評価項目	4.4 レベル別共分散構造分析モデル
3.3 調査の手順	4.5 因果モデルのまとめ
3.4 分析方法	5. おわりに

1. はじめに

外国語学習者の発話に対する母語話者の評価には、学習者の言語能力そのものだけでなく、学習者のパーソナリティも評価の対象として重視されることが明らかになっている (Albrechtsen et al. 1980、Thomas 1983、Okamura 1995、小林2000など)。日本語学習者（以下、単に「学習者」とも記す）に対する日本語母語話者（以下、単に「母語話者」とも記す）の評価研究にもこのような見解が支持され、近年多くの研究がなされている (西郡1997、渡部2004、崔2009、野原2011など)。しかし、学習者のパーソナリティ評価に、学習者の言語やパラ言語・非言語能力がどの程度、どのように影響を与えるのかなどについての因果関係を検証したものは、崔 (2012a、2012b、2012c) の研

* 首都大学東京 助教 日本語教育学

究以外見られない。崔 (2012b) は、例えば、学習者の「文法」や「流暢さ」などの言語能力が高く評価されると、会話での「相槌」や「間の取り方」(パラ言語)が上手だという評価につながり、また、そのパラ言語能力が学習者に対する「個人的親しみやすさ」や「社会的望ましさ」などのパーソナリティ評価に大きく影響を与えることを、共分散構造分析を用いて検証し、学習者の発話に対する母語話者評価の因果関係モデルを提案した。本稿は、崔 (2012b) の因果 (関係) モデルに基づき、日本語運用能力の異なる中級・上級学習者に対する母語話者評価の因果関係を検証し、レベル別相違点・類似点を明らかにすることを目的とする。

本稿は、まず、第 2 節で先行研究について述べ、第 3 節では本研究の方法について、崔 (2009) で得られたデータを含め、紹介する。また、第 4 節では分析結果について示し、第 5 節はまとめとする。

2. 先行研究

母語話者による学習者の発話に対する評価と印象との関係を調査したものとしては、西郡 (1997)、渡部 (2004)、崔 (2007)、崔 (2009) などが挙げられる。

西郡 (1997) では、外国人と日本人との初対面会話において、母語話者が日本語の流暢な外国人と話す時に抱く対人印象はパラ言語や外見の影響が大きいことを示し、初対面の会話における対人印象形成の主要素は「個人的親しみやすさ」と「社会的望ましさ」であると報告している。その中でも特に、日本人が外国人に接する時「社会的望ましさ」に対して厳しい評価をするとされている。しかし、この研究は西郡自身も指摘しているとおり事例数が少なく、質問項目の収集方法においても問題が残る。

渡部 (2004) では、中国人学習者と母語話者との自由会話ビデオを用い、母語話者の評価をもとにした調査を行ったが、母語話者が学習者の発話进行评估する際、日本語の「運用能力」以外にも「親しみやすさ」や「積極性」というパーソナリティが評価基準になることを報告している。また、その「親しみやすさ」と「積極性」に関する評価は、学習者の「ストラテジー」に対する評価が高いほど高くなり、さらに「積極性」の評価には学習者の「表現力」も多く影響を与えるとされている。しかし、この報告は、評価の材料である会話ビデオが中国人学習者と母語話者 1 組のみであり、またその会話内容も 2 分間という短い会話の評価なので、母語話者の評価 (55 の評価項目) に対する信頼性に疑問が残る。

韓国人学習者を被評価者として調査を行った崔 (2007) によれば、母語話者が韓国人学習者に対して抱く印象には『社会的望ましさ』¹⁾『個人的親しみやすさ』『活動性』とい

1) 『 』は因子 (構成概念) で、「 」はその因子を構成する項目 (観測変数) を表す。

パーソナリティ因子が潜在的に働くとされ、その中でも「信頼性」「まじめさ」「誠実さ」などの要素で構成される『社会的望ましさ』が印象形成において最も重要な要素であった。さらに、学習者の「相槌」「(会話での)間の取り方」「視線」などのパラ言語や非言語的要素が、『社会的望ましさ』に関する印象の判断基準として大きく影響を与えることを報告している。しかし、崔(2007)の研究も韓国人学習者に限った調査であり、日本語学習者全般における傾向までは解明していないと言える。

崔(2009)は、先行研究の問題点を踏まえて、さまざまな言語文化背景を持つ日本語学習者20名を対象に、日本語母語話者による評価を行った。また、評価者は日本語教師・大学生・主婦・社会人男性といった属性の異なる日本語母語話者(計135名)であり、幅広い学習者および評価者を対象としている。崔(2009)では、因子分析や重回帰分析などの多変量解析に基づいて、学習者に対する評価と印象との関係を調査したが、因子分析などで得られた潜在変数(因子)間の因果関係の検証は将来の課題とされていた。

そこで、崔(2012a, 2012b)では、崔(2009)で得られたデータを用い、学習者に対する母語話者評価の因果関係を検証した。また、それにより、日本語学習者の発話に対する日本語母語話者評価の因果関係モデルを作成した。

3. 方法²⁾

本稿では、崔(2009)で得られたデータに基づき、学習者を日本語運用能力別に分けて分析・検証を行うが、本節ではその研究方法について示す。

3.1 日本語学習者および評価材料

本調査で被評価者となる日本語学習者は、都内の大学および日本語学校に在籍する留学生20名である。中級レベル学習者10名(韓国・中国・インドネシア・タイ出身者各2名、イギリス・アメリカ出身者各1名)と上級レベル学習者10名(韓国・中国・インドネシア・タイ出身者各2名、イギリス・カナダ出身者各1名)で構成されており、学習者の日本語レベルの判定については、学習者の自己申告およびフェイス・シート³⁾の内容、

(本インタビューとは別の)筆者とのインタビューを総合的に見て、最終的には筆者が判断して決定した。レベルの判断が難しい学習者に関しては、長年日本語教師をしている人(評価者には含まれない)にレベルの判断をしてもらった。以下の表1に学習者の構成を示す⁴⁾。

2) 3.1節～3.3節で示すものは崔(2009)に基づいている。

3) 調査時に学習者に書いてもらったものである。

表 1 学習者（被評価者）

レベル	中級	上級	計	
国籍	韓国・中国・インドネシア・ タイ・アメリカ・イギリス	韓国・中国・インドネシア・ タイ・カナダ・イギリス		
母語	韓国語/中国語/インドネシア語/タイ語/英語			
年齢	18歳～37歳	20歳～30歳		
日本滞在期間	6ヶ月～2年1ヶ月	11ヶ月～5年2ヶ月		
男	5名	5名	10名	
女	5名	5名	10名	
計	10名	10名	20名	

また、母語話者が評価する材料となる学習者の発話（刺激ビデオ）は、学習者20名と評価者ではない母語話者アナウンサーとの1対1の会話20組である⁵⁾。評価材料は発話の最初の5分間だけを対象とし⁶⁾、刺激ビデオは、学習者だけを正面から映し、アナウンサーは映さずに音声だけが入るものを用いた。さらに、刺激ビデオは、のちに135名の母語話者に評価してもらうことになるが、ビデオで視聴する20組の会話の提示順が評価に与える影響をできるだけ排除するため、会話の提示順をランダムに並べ替え、視聴する順番が異なる5種類の刺激ビデオを作成した。評価者はそのうちの1つを視聴することになる。

3.2 調査対象者（評価者）および評価項目

学習者の発話に対して評価を行う評価者（母語話者）の構成は表2のとおりである。東京都内や東京近辺に居住する日本語母語話者135名で、その属性は日本語教師・

- 4) 学習者の言語運用能力のレベルおよび年齢、日本滞在期間は調査時点のものである。本調査の対象となる留学生は、来日前から日本語を学んでいる人も多く、日本滞在期間と日本語レベルとの関係を探ることは不可能であると判断する。ただし、留学生が来日後、日本人との接触を通じて会話ストラテジーを学んでいくことは周知の事実である。学習者の日本滞在期間が母語話者による評価の背後にある因果関係にどのように影響するかについては今後調査をしていく必要があろう。なお、20名の留学生それぞれの滞在期間・学習時間などの詳細については崔（2012b）を参照されたい。
- 5) 会話場面は、学習者が日本人のアナウンサーにインタビューを受けるものであり、インタビュアーと学習者は初対面であった。学習者には、語学教材用で、留学生が話す日本語をビデオで収録するとか伝えておらず、インタビューの終了後に実験の目的を伝え、許諾書を求める方法を取った。インタビューの内容は「日本の食べ物や食習慣などについて」で、インタビュアー（アナウンサー）からの質問内容は統制して行った。
- 6) それぞれの発話内容は10分以上のものであったが、予備調査および先行研究（崔2005）から、発話内容の分析においては5分程度の内容が妥当であると判断し、5分間のインタビュー内容を評価材料として用いることにした。

大学生・主婦・社会人男性となる7)。

表2 母語話者(評価者)

属性	日本語教師	大学生	主婦	社会人男性	計
年齢	24歳～71歳	18歳～22歳	35歳～76歳	28歳～74歳	
男	5名	12名	—	31名	48名
女	33名	21名	33名	—	87名
計	38名	33名	33名	31名	135名

本調査は、母語話者が学習者の発話ビデオ(刺激ビデオ)を見ながら評価を行うが、そこで使用する評価項目(質問紙の項目)は次の2群(40項目)から構成される。1つは、「言語・パラ言語および非言語的特徴に関する評価」(以下、「言語・パラ言語・非言語評価」と称する)という項目群で、もう1つは「対人印象に関する評価」(以下、「対人印象評価」と称する)という項目群である8)。

「言語・パラ言語・非言語評価」の項目群は、先行研究(西郡1997、原田1998、石崎1999、渡部2004)を参考にするとともに、日本語教師3名9)に「言語・パラ言語・非言語評価」に関する評価項目を列挙してもらい、列挙してもらった項目をKJ法によって分類・選定した。「対人印象評価」の項目群も、先行研究(大橋ほか1975、林1978、林ほか1983、井上1994、西郡1997)を参考にするとともに、日本語教師3名10)、院生2名、主婦2名11)に「対人印象評価」に関する項目を列挙してもらい、列挙してもらった項目をKJ法によって分類・選定した(川喜田1967参照)。

- 7) 日本語教師と日本語教師以外の母語話者(大学生・主婦・社会人男性)では、異なる評価が予想されるが、本稿の目的は、中級・上級レベルの学習者に対する母語話者全般の評価の傾向を調べることであり、日本語教師を含む母語話者全体を対象にして分析・検証を行うことにする。また、母語話者が留学生との接触に慣れているかいないかによっても評価が異なることが考えられるが、それについても本稿では考慮していない。日本語教師と日本語教師以外の母語話者による評価とその評価の因果関係の検証および母語話者の留学生との接触経験と評価の因果関係の検証については、別稿に譲りたい。なお、本調査では、調査時の評価者のフェイス・シートに、「留学生にあって話をする(した)ことがありますか」という質問項目を設け、留学生とどの程度接触しているかを4段階(①全くない②あまりない③ややある④たくさんある)で聞いている。その結果、日本語教師以外の母語話者97名の回答は、「①全くない」が18名、「②あまりない」が38名、「③ややある」が29名、「④たくさんある」が12名となった。参考までに付け加えると、大学生の評価者には日本語教育専攻(副専攻を含む)の学生は含まれていない。
- 8) 質問紙の評価項目については、4.1節の表3を参照されたい。
- 9) 東京都内にある日本語学校の教師で、調査における評価者には含まれていない。
- 10) 注9で述べた日本語学校教師と同一人物である。
- 11) この2人も調査における評価者には含まれていない。

3.3 調査の手順

2007年12月から2008年5月にかけて、主に、大学生は首都大学東京マルチメディア教室で、社会人男性は首都大学東京飯田橋キャンパス講義室で、日本語教師は都内にある日本語学校で、ビデオの評価をしてもらった。主婦グループは首都大学東京マルチメディア教室と首都大学東京飯田橋キャンパス講義室を併用して行った。

評価者（母語話者）は学習者の発話ビデオ（評価材料）を視聴して、予め用意してある調査表に、「言語・パラ言語・非言語評価」20項目と「対人印象評価」20項目のすべてについて5段階で評価をした（5件法）。

20組の発話について評価をするため、調査時間は、全部で約2時間半から3時間程度かかった。調査は、評価者1名だけが視聴する個人調査と2名～6名の複数の評価者が同時に視聴する集団調査を併用して行った。すべての調査は筆者の立ち合いのもとで行い、調査の前後あるいは途中で生じた評価者からの質問などにはその都度対応した。調査の途中、10人の学習者の評価が終わったところで一度休憩を挟んだが、休憩時は調査や学習者などに関して話し合えないようにと断っておいた。学習者に関する情報や評価の基準などについて話し合うと、残りの学習者評価へ影響することがあるためである。以下に、調査の手順を示す。

- ①教示：研究目的および実験目的・手順を示し、ビデオは日本語学習者（留学生）が日本人のアナウンサーにインタビューを受ける場面であること、アナウンサーの話す内容を統制したこと、アナウンサーと留学生は初対面であることなどを伝えた。
- ②質疑時間：調査対象者にアンケートの評価項目を一度通して読むよう指示し、評価項目や調査に関する質疑応答時間を設けた。なお、日本語教師以外のグループにおいては、フィラー・語尾伸び・途中終了などの専門用語に関する知識を持っていない人もいる可能性があるため、それらの説明も同時に行った。
- ③評価：1人目の学習者のビデオを見終わったら、ビデオを一度止め、予め用意しておいたアンケート用紙に、各評価項目（40項目）すべてについて回答してもらった。回答方法は、左側から、ネガティブな評価←「1とても」「2やや」「3ふつう（どちらでもない）」「4やや」「5とても」→ポジティブな評価の順で、5段階の評価を求めた。
- ④2人目以降のビデオも③と同様に学習者のビデオ視聴と評価を行ってもらい、20名全員の評価を順番に行った。（前述したように、20名分のビデオが提示される順序はランダムにした。）
- ⑤フェイス・シートの記入：調査対象者に職業、性別、年齢などについて書くよう指示した。

3.4 分析方法

3.1～3.3節で得られたデータ（崔2009の調査で得られたデータ）を用い、本稿では新

たに分析を行った。まず、探索的因子分析を行い、因子を抽出する。学習者20名に対する母語話者（135名）の評価の項目別得点をもとに因子分析を行い、母語話者が学習者に対して抱く「対人印象評価」や「言語・パラ言語・非言語評価」についての要因を抽出するとともに各要因の主要素を抽出する。

そのあと、共分散構造分析を用い、母語話者の評価の因果（関係）モデルを描くために、因果モデルに用いる観測変数（評価項目）を選出する。上記の因子分析で得られた各因子の中から負荷量が最も高く、因子を構成する項目として最も安定している上位項目を選ぶことにする。

次に、共分散構造分析を用いて、因果モデルを作成し、中級・上級レベルの学習者に対する母語話者評価の因果関係を検証する。分析にはすべてSPSS for Windows 19と共分散構造分析用のソフトウェアAmos 19を用いた。

4. 分析結果

4.1 因子分析

「言語・パラ言語・非言語評価」「対人印象評価」として想定した計40項目について20名の学習者に対する全評価者135名（計2700ケース）の評価値を用いて探索的因子分析（主因子法）を行った。その際、因子回転は因子間の相関を許容する斜交回転（プロマックス法）を用いた。因子数は、内容的妥当性と分散の説明率を考慮して、6因子が妥当であると判断し、それを採用した¹²⁾。なお、表3から分かるように、複数の因子に重なって高い負荷量を示す項目が見られた（b5：「元気」、b17：「活発」、b1：「積極」、a13：「協力」など）。さらに、第6因子（VI）においては、高い負荷量を示す項目が2つ（「自信」「積極」）しかないため、複数の因子に重なる項目などを削ると、その影響によって第6因子に所属する項目がなくなってしまう可能性がある。そこで、本稿では、複数の因子に重なる項目が、それぞれの因子から同程度で影響を受けていると判断し、削除をせずに分析を行った。因子分析の結果を表3に示す¹³⁾。

12) 6因子全体での累積寄与率は63.30%であった。6因子をI～VIとして示す。

13) 表中のaは「言語・パラ言語・非言語評価」項目を、bは「対人印象評価」項目を示す。また、項目内容の太字の部分は共分散構造分析（因果モデル作成）に用いる項目を示し、項目の最後につけた（ ）の中は分析における変数を表すための略称である。

表 3 因子分析の結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目内容	I	II	III	IV	V	VI
b15 明るい人だ。(明るい)	.88	-.05	-.15	.00	.03	.22
b4 親しみやすい人だ。(親しみ易)	.81	-.03	.04	.07	.02	-.03
a18 表情が豊かである。(表情)	.80	-.02	-.23	.18	-.05	.07
b16 好感の持てる人だ。	.80	.01	.20	-.03	.00	-.10
a20 外見が魅力的である。	.76	.10	.01	-.08	.01	-.09
b10 好きになれそうな人だ。	.76	.02	.29	-.12	.01	-.14
b12 魅力のある人だ。	.75	.10	.23	-.15	.01	-.04
b18 話しやすい人だ。	.74	.05	.05	.07	.01	.01
b5 元気な人だ。	.72	-.06	-.14	.06	.03	.43
b17 活発な人だ。	.68	-.01	-.09	-.01	.03	.42
a19 身振り手振りが多い。	.54	-.01	-.21	.00	-.16	.07
b19 協調的な人だ。	.45	-.09	.29	.23	-.01	-.01
a1 正しい文法を使っている。(文法)	-.02	.92	.00	-.08	.00	-.04
a4 話し方が流暢である。(流暢)	-.02	.88	-.07	.02	.01	.12
a9 話し方が日本語として自然である。(自然)	.01	.87	-.07	.06	-.02	.04
a2 一つひとつの言葉を正しく発音している。	.06	.87	-.06	-.05	.01	-.04
a3 イントネーションやアクセントが正しく、 分かりやすい。	.03	.85	-.05	.01	.01	-.02
a5 語彙の使い方が正しい。	-.03	.83	.01	.03	-.01	-.01
a8 単語や表現をよく知っている。	-.06	.78	.05	.03	-.02	.11
b13 まじめな人だ。(まじめ)	-.21	-.09	.95	.03	-.04	.04
b7 誠実な人だ。(誠実)	.03	-.11	.84	.02	-.05	.05
b9 信頼できそうな人だ。(信頼)	.15	.02	.80	-.10	-.04	.07
b8 しっかりした人だ。	-.06	.08	.77	-.06	-.02	.30
b2 責任感が強そうな人だ。	-.06	-.03	.73	-.02	.02	.35
b11 知的な人だ。	.02	.20	.69	-.13	.02	.15
b14 礼儀をよくわきまえた人だ。	.03	-.11	.68	.21	.06	-.09
b20 落ち着いた人だ。	-.17	.08	.60	.19	-.03	-.19
b3 率直な人だ。	.27	-.04	.38	.07	-.03	.22
a15 あいづちの打ち方が適切である。(相槌)	.07	.08	.03	.72	-.06	.04
a16 間の取り方が適切である。(間)	.03	.17	.06	.65	-.04	.01
a13 話し方が、二人で対話することに協力的で ある。	.31	-.08	.05	.54	.02	.02
a14 視線の合わせ方が適切である。	.27	-.03	.02	.51	.01	.01
a17 話し方の速度が適切である。	.03	.38	.03	.39	-.05	.01
a7 質問に適切に答えている。	-.02	.33	.17	.34	.06	-.01
a6 話し方が丁寧である。	.04	.16	.28	.32	.10	-.13
a11 語尾伸び(私は一、～ですが一などの言い 方)が多い。(語尾伸び)	.14	.03	.04	.04	-.87	-.06
a10 フィラー(えーと、まあなどの言い方)の 使用が多い。(フィラー)	-.03	-.02	.07	.06	-.69	.03
a12 途中終了の言い方が多い。(途中終了)	-.02	-.11	-.06	-.13	-.40	-.02
b6 自信のある人だ。(自信)	.17	.12	.27	-.05	.01	.57
b1 積極的な人だ。(積極)	.45	-.01	.00	.13	.00	.51
因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
I	—	.38	.64	.62	.26	.31
II		—	.56	.59	.49	.23
III			—	.63	.45	.22
IV				—	.43	.24
V					—	.11
VI						—

次に、得られた結果をもとに、各因子に高い負荷を示す項目群の内容から、因子の意味について検討したが、いずれの項目群も内容的に概ね統一性が見られた。まず、**第1因子 (I)** は、「明るい」(0.88)、「親しみ易」(0.81)、「表情」(0.80)などに対して負荷量が高く、これは林(1978)の言う認知次元¹⁴⁾のうち「個人的親しみやすさ」に一致するものと思われるので、「**個人的親しみやすさ**」因子と呼ぶことにする。**第2因子 (II)** は、「文法」(0.92)、「流暢」(0.88)、「自然」(0.87)などで負荷量が高く、これらは、言語の正確さおよび適切さに関わる言語能力項目と言えるので、「**言語能力**」因子と命名する。また、**第3因子 (III)** においては、「まじめ」(0.95)、「誠実」(0.84)、「信頼」(0.80)などで負荷量が高く、これも林(1978)の言う認知次元の1つである「社会的望ましさ」に一致するものと思われるので、「**社会的望ましさ**」因子とする。さらに、**第4因子 (IV)** においては、「相槌」(0.72)、会話での「間」の取り方(0.65)などの順に因子負荷量が高く、これらはコミュニケーションを取る際、相手と深く関係があるパラ言語的な項目と言える。そこで、この因子を「**パラ言語能力**」と呼ぶ。**第5因子 (V)** は、因子負荷の絶対値が高い方から順に「語尾伸び」(0.87)、「フイラー」(0.69)、「途中終了」(0.40)となっている。これらの項目はパラ言語的特徴ではあるが、コミュニケーションを取る相手との関係というよりも話し手自身による一方的な言語スタイルであることから「**話し手の方略**」因子と呼ぶことにする。最後に、**第6因子 (VI)** は「自信」(0.57)、「積極」(0.51)などで負荷量が高く、これも林(1978)の言う認知次元の1つである「活動性」に一致すると思われるので「**活動性**」因子とする。

続いて、上記の40項目の評価尺度について、その信頼性がどれくらいなのか、すなわち、同じ因子内の項目に一貫性があるかどうかを検討した。信頼性を検討するために一般的に用いられる方法として、クロンバックの α 係数の算出が挙げられる。そこで、本稿でもその値を算出し、尺度の内的融合性によって信頼性を検討した。なお、評価項目の中で、マイナスの負荷量を示している項目（「語尾伸び」「フイラー」「途中終了」）については、逆転項目の処理をした上で α 係数を算出した¹⁵⁾。その結果、第1因子から第6因子までの α 係数はそれぞれ、0.94/0.95/0.92/0.88/0.68/0.80を示した。 α 係数が0.70以上なら信頼性が高いと示唆される（小塩2004）こ

14) 印象形成過程の研究には、情報統合理論、つまり刺激人物が出す様々な刺激情報から印象を評価・予測する理論に基づいたものがある。その一方、刺激人物ではなく認知者側の主体的要因に注目した研究も多い。そのうち、林(1978)は、暗黙裡の人格観という概念に基づき、人が人に対して抱く印象は刺激人物からの情報の総合だけではなく、認知者側が前提として持っている知識やパーソナリティが強く影響を及ぼすとし、人々の認知構造に共通した認知次元には「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性(ないしは力本性)」という基本的な3次元があると報告している。この認知次元は、その後の研究でも支持されていることから、本稿でもこれを取り入れることにする。

15) 表3の「語尾伸び」「フイラー」「途中終了」の3項目は第5因子に関して負の負荷量を示しているが、これが「逆転項目」に該当する。 α 係数を算出する際には「逆転項目の処理」を行う必要があり、これをしないと α 係数は極めて低い値になってしまう（小塩2004：144）。

とから、下位尺度が信頼性の基準を満たしていると判断した¹⁶⁾。

4.2 共分散構造分析用項目

本節では、共分散構造分析で用いる項目の選定について述べる。共分散構造分析によるモデリングを行う場合、分析者によっては、内的整合性の高い項目を合算して1個の観測変数とすることもある。しかし、本稿での因子分析は、因子構造を探ることを目的とするので、いくつかの因子から重なって影響を受ける項目についても削除をせずに因子の解釈を行った。そこで、本稿では、それぞれの因子を構成する項目の中から、最も安定した結果を出していると思われる負荷量の上位3項目¹⁷⁾ずつを使用尺度とし、共分散構造分析を用いてモデリングと解釈を行うことにする。すなわち、「言語・パラ言語・非言語評価」「対人印象評価」に関する40項目の中から、前節の因子分析の結果、各因子を構成する項目の負荷量が最も高い値を示している上位項目を選ぶことにした（Ⅰ：「明るい」「親しみ易」「表情」、Ⅱ：「文法」「流暢」「自然」、Ⅲ：「まじめ」「誠実」「信頼」、Ⅳ：「相槌」「間」、Ⅴ：「語尾伸び」「ファイラー」「途中終了」、Ⅵ：「自信」「積極」）。

4.3 共分散構造分析用項目の平均値および *t* 検定

上記で選定した16項目に対する母語話者135名の平均値および *t* 検定の結果を、図1と表4に示す。

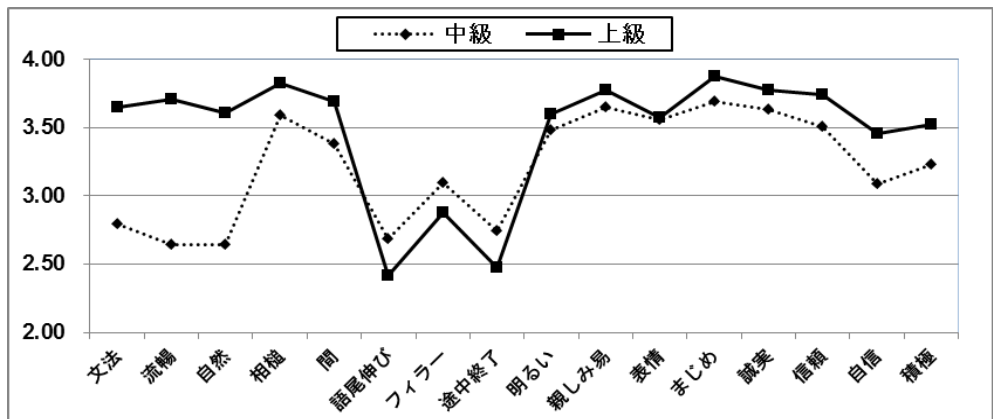


図1 主要項目の平均値

- 16) 小塩 (2004:143) では、 α 係数が0.50以下である場合は尺度の再検討を行う必要があるとされている。本研究の結果、Ⅴ因子の α 係数は0.68となり、0.70より若干低い値を示しているが、許容範囲であると判断した。
- 17) ⅣとⅥについては2つの項目のみとなる。Ⅳを構成する項目の中で、因子負荷が3番目に高い項目（「協力」）が他の因子ともやや高い負荷量で重なっているため、その影響を避けるため、上位の2項目に限定した。

表4 レベル別主要項目の平均値とSDおよび t 検定の結果

項目	中級		上級		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
文法	2.79	0.933	3.65	0.992	$t(2688.02)=23.25, p<.001$
流暢	2.64	1.008	3.71	1.076	$t(2686.52)=26.83, p<.001$
自然	2.64	0.954	3.61	1.059	$t(2669.08)=25.06, p<.001$
相槌	3.59	0.892	3.82	0.92	$t(2698)=6.61, p<.001$
間	3.38	0.926	3.69	0.942	$t(2698)=8.61, p<.001$
語尾伸び	2.68	0.974	2.42	0.983	$t(2697.79)=-7.01, p<.001$
フィラー	3.10	0.989	2.88	1.065	$t(2683.53)=-5.64, p<.001$
途中終了	2.75	1.01	2.47	1.099	$t(2679.12)=-6.66, p<.001$
明るい	3.48	1.005	3.60	0.88	$t(2651.84)=3.33, p<.01$
親しみ易	3.65	0.953	3.77	0.901	$t(2689.60)=3.47, p<.01$
表情	3.55	1.059	3.58	0.974	$t(2679.20)=0.59, n.s.$
まじめ	3.69	0.787	3.87	0.748	$t(2690.97)=6.12, p<.001$
誠実	3.63	0.782	3.77	0.761	$t(2696.03)=4.80, p<.001$
信頼	3.51	0.835	3.74	0.808	$t(2698)=7.36, p<.001$
自信	3.09	0.883	3.46	0.861	$t(2696.24)=10.95, p<.001$
積極	3.23	0.956	3.52	0.876	$t(2698)=8.34, p<.001$

図1と表4から分かるように、上級レベル学習者に比べ、中級レベル学習者に対して『言語能力』（「文法」「流暢」「自然」）に関する評価が低い。 t 検定を行った結果、これらの項目すべてにおいて有意差が出ている。当然かもしれないが、学習者の言語運用能力が低いと、言語規則に対する評価や日本語に対する印象は当然低くなる。その他、「相槌」や「間（の取り方）」などに関しても、母語話者は上級レベル学習者を若干高く評価し、やはり有意差が出ている。さらに、「語尾伸び」「フィラー」「途中終了」に関する評価は、中級レベルの学習者の平均値が高い。これらの3項目に関しては、質問項目の内容から分かるように、その言い方が多いと評価値が高くなる（表3参照）。つまり、母語話者は、中級レベル学習者のほうが上級レベル学習者よりも「語尾伸び」「フィラー」「途中終了」の言い方が多いと判断していることが分かる。加えて「表情」に関する評価では学習者の差がほとんど見られず、有意差も現れなかった。続いて「対人印象評価」項目を見ると、8つの項目（表4の「明るい」から「積極」まで）すべてにおいて、中級レベル学習者よりも上級レベル学習者に対して良い評価をしている（統計的にも有意）。次節では、上記の項目（観測変数）および因子分析で得られた因子（潜在変数）を用い、レベル別母語話者の評価にはどのような因果関係があるのか、共分散構造分析モデルにより明らかにする。

4.4 レベル別共分散構造分析モデル

因子分析の結果得られた16項目を観測変数とし、共分散構造分析を通じてモデリングを行い、中級レベルと上級レベルにおいて最も妥当であると思われるモデルを採択した（図

2 と図 3) 。このモデルのデータに対する適合度を表す GFI はそれぞれ 0.931/0.950、AGFI は 0.899/0.926、CFI は 0.935/0.960、RMSEA は 0.077/0.062 となり¹⁸⁾、データへの当てはまりが十分であることが確認された¹⁹⁾。

図中の単方向の矢印の数値は標準化された因果係数を表し、双方向の矢印の数値は相関係数を表す²⁰⁾。また、すべての観測変数と『個人的親しみやすさ』『社会的望ましさ』『活動性』『パラ言語能力』の右上に付与した数値は決定係数 (R^2) を表す。なお、ほとんどの因果係数および相関係数は 0.1% 水準で統計的に有意な値であった (図 2 の『話し手の方略』→『社会的望ましさ』、図 3 の『言語能力』→『社会的望ましさ』、『話し手の方略』→『パラ言語能力』、『話し手の方略』→『社会的望ましさ』の因果係数は 1% 水準で、図 3 の『社会的望ましさ』→『個人的親しみやすさ』の因果係数は 5% 水準で有意であった)。

さらに、『個人的親しみやすさ』『社会的望ましさ』『活動性』『パラ言語』それぞれの決定係数は 0.74/0.67、0.44/0.45、0.36/0.48、0.36/0.45 であり²¹⁾、検証した原因と結果は、かなりの部分で説明されると言える。また、構成概念 (因子) から各観測変数への因果係数は一箇所 (図 2 の『話し手の方略』→「途中終了」) を除いてすべて 0.55 以上であり、構成概念と観測変数との対応も適切であると言える。以上の結果から、図 2 と図 3 ともにモデルの妥当性が検証された。

18) 前者は中級レベル、後者は上級レベル学習者に対する数値である。

19) モデルの評価を行うために、GFI/AGFI/CFI ともにその値が 1 に近いほど説明力がある (データへの当てはまりが良い) モデルと判断し、RMSEA の場合は、その指標が 0.05 以下であればとても当てはまりが良く、0.1 以上であれば当てはまりが良くないと判断する (豊田 2007: 18)。

20) 因果係数および相関係数 (標準化解の場合) ・共分散 (非標準化解の場合) などをパス係数とも言う。本稿では因子の関係の強さを調べるため、またデータそのものに絶対的な単位が存在しないため、標準化解を行う。

21) 前者は中級レベル、後者は上級レベル学習者に対する数値である。

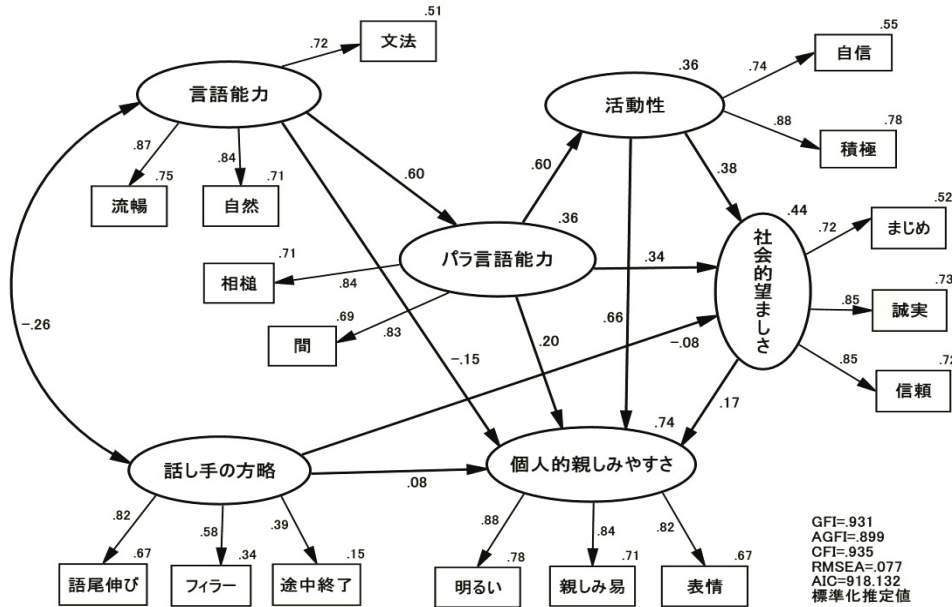


図2 中級レベルの学習者に対する母語話者評価の因果モデル (誤差項省略)

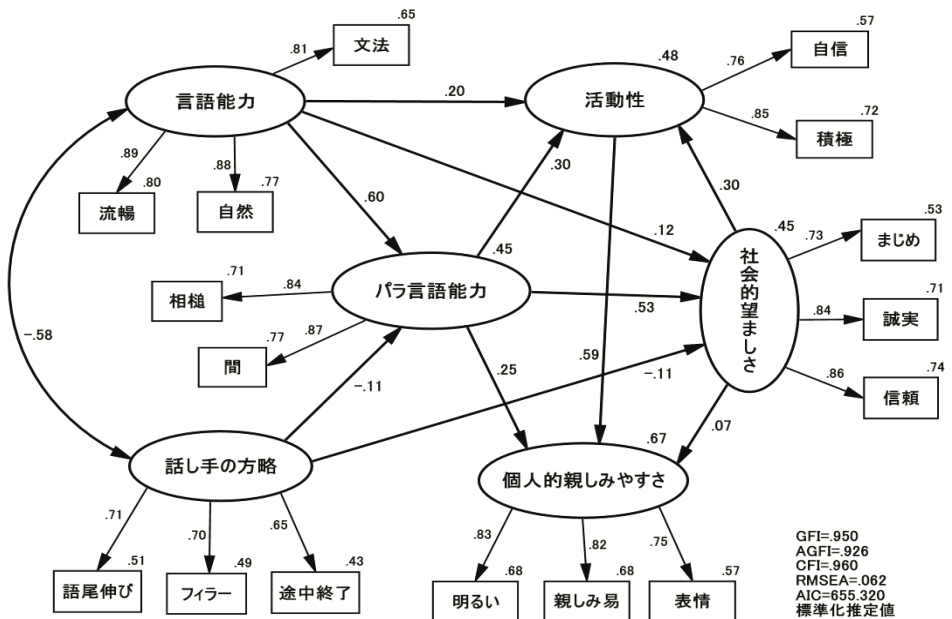


図3 上級レベルの学習者に対する母語話者評価の因果モデル (誤差項省略)

4.5 因果モデルのまとめ

調査の結果得られた「対人印象評価」と「言語・非言語・パラ言語評価」との因果関係について、以下にまとめる。まず、『個人的親しみやすさ』評価には、中級レベルでは、学習者の『言語能力』『パラ言語能力』『話し手の方略』および『活動性』と『社会的望ましさ』が直接影響を与えていることが分かった(『活動性』は特に大きく影響する)。一方、上級レベルでは、学習者の『パラ言語能力』および『活動性』と『社会的望ましさ』が評価に直接影響し(やはり『活動性』が大きく影響している)、さらに、上級レベル学習者の『言語能力』は『個人的親しみやすさ』評価には直接影響を与えず、『パラ言語能力』や『活動性』などを介して影響することが明らかになった。

次に、『社会的望ましさ』評価においてもレベルによって異なる結果となった。中級レベルでは、学習者の『パラ言語能力』『話し手の方略』および『活動性』が評価に影響を与えており、上級レベルでは、学習者の『言語能力』『パラ言語能力』『話し手の方略』が評価に影響することが判明した(『パラ言語能力』は特に大きく影響する)。

『活動性』評価には、中級レベルでは、学習者の『パラ言語能力』が大きく影響し、上級レベルでは、学習者の『言語能力』と『パラ言語能力』に加えて『社会的望ましさ』印象が評価に影響を与えている。

また、両レベルともに現れた特徴として、学習者の『言語能力』が学習者の『パラ言語能力』に大きく影響し(中級・上級レベルともに因果係数が0.60を示す)、言語能力の評価が高いとあいづちや間の取り方といったパラ言語能力の評価も高くなることが分かる。さらに、学習者の『言語能力』と『話し手の方略』の間で負の相関が現れた(中級・上級レベルの相関係数はそれぞれ0.26/0.58を示す)。つまり、学習者の言語能力に関する評価が高いからといって学習者の方略能力に関する評価が高くなるわけではなく、また、学習者の方略能力に関する評価が高いからといって学習者の言語能力に関する評価が高いとは言えない。

因果モデルの結果から特に注目したいのは、中級・上級レベルの学習者ともに、学習者の『パラ言語能力』が各パーソナリティ評価に大きく影響することである(レベルによって因果係数は異なる)。特に、母語話者は言語運用能力の高い上級レベル学習者に対して、中級レベル学習者よりもあいづちや間の取り方などのパラ言語能力を中心に据えて評価をする(学習者のパラ言語能力が、「対人印象評価」の主要素である『個人的親しみやすさ』および『社会的望ましさ』に与える影響は、上級レベル学習者のほうが大きい)。また、その『パラ言語能力』には学習者の『言語能力』が大きく影響することにも注目すべきである。とりわけ、学習者と母語話者がコミュニケーションを行う際には、互いに、適切なあいづちを打ち、会話での間の取り方に注意したほうが、つまり、適切なタイミングで間を取ったほうが、よい印象につながると考えられる。それに加えて、学習者は(日本語の)言語形式的な能力、例えば、文法や流暢さ、日本語として自然な言い方などを身につけるこ

とも大事であることが示唆される。

続いて、それぞれのレベルのみに現れた因果関係について述べておこう。まず中級レベルのみに現れた因果関係は次の2つである。学習者の『言語能力』が学習者に対する『個人的親しみやすさ』に直接影響し（負の因果係数）、また、学習者の『話し手の方略』が『個人的親しみやすさ』（弱い関係）に影響を与えることが明らかになった。つまり、学習者の言語能力が低いほど母語話者は学習者に親しみを感じ、語尾伸びやファイアー・途中終了の言い方が多い学習者にも親しみを感じると言い換えることができる。次に、上級レベルのみに現れた因果関係は3つある。学習者の『言語能力』が学習者に対する『社会的望ましさ』印象評価に直接影響を与え、また学習者の『言語能力』が『活動性』評価にも影響を与える。さらに、学習者の『話し手の方略』が『パラ言語能力』評価に影響することが判明した（負の因果係数）。つまり、母語話者は、言語能力が高い学習者を、社会的に望ましい人であると判断し、さらに活動性があると判断するということである。また、語尾伸びやファイアー・途中終了の言い方が多い学習者については、パラ言語能力（「相槌」「間」）が低いと判断することが分かった。

中級レベルと上級レベル学習者に対する評価の因果関係モデルで特徴となるもう一つの点は、『活動性』と『社会的望ましさ』との関係である。原因と結果を表すパスが逆で現れている。すなわち、中級レベルでは、学習者の『活動性』（「自信」「積極」）が『社会的望ましさ』評価に影響をし、上級レベルでは、学習者の『社会的望ましさ』（「まじめ」「誠実」「信頼」）が『活動性』評価に影響を与えていることが明らかになった。

5. おわりに

本研究の結果、母語話者が学習者を評価する際には、学習者の『言語能力』『パラ言語能力』『話し手の方略』および『個人的親しみやすさ』『社会的望ましさ』『活動性』のパーソナリティが潜在的に働くことが明らかになった。またそのパーソナリティ評価には、学習者の「言語・パラ言語および非言語的特徴」が大きく影響することが判明した。本稿では、崔（2012a、2012b）が提案した母語話者評価の因果（関係）モデルに基づき、中級レベルと上級レベルの学習者に分けて、母語話者評価の因果関係を検証した。その結果、両レベルに共通して現れる因果関係および相関関係（それぞれのパス係数は異なる）が明らかになり、また、レベルにより異なる（評価の）因果関係が判明した。すなわち、母語話者が学習者を評価する際には、学習者の言語運用能力によって異なる判断基準を持ち、学習者の言語能力やパラ言語能力が、母語話者の学習者に対する『個人的親しみやす

さ』『社会的望ましさ』『活動性』などのパーソナリティに大きく影響を与えることが検証された。また、それにより、学習者のレベル別母語話者評価の因果関係モデルを提案することができた。これまでの母語話者評価研究では、言語的な正確さや流暢さ、あるいは、親しみやすさ、分かりやすさなどの個々の評価の観点に焦点をおいたものが多く、母語話者が学習者の発話を全体的にどのように評価し、その評価の流れにどのような因果関係があるのかを検証したものはほとんどなかった。本稿では、母語話者の評価の因果モデルを明らかにすることにより、評価における各観点がそれぞれ独立に存在しているのではなく、お互いに複雑に絡み合っていることが判明した。

今後の課題として、次のことを挙げておこう。まず、今回のようなインタビューを初級学習者に行うのは困難かもしれないが、工夫をして、初級学習者についても同様の調査を行いたい。また、本調査では、量的データを集めるため、第三者による評価を行ったが、今後は会話当事者に相互評価を行い、評価による個人差などを分析・検証をしていきたい。

【謝辞】

本稿は、韓国日本文化学会第43回国際学術大会の発表内容をもとに加筆しました。本稿執筆にあたり、査読者の方々から貴重なコメントをいただきました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- 石崎晶子 (1999) 「学習者の言語行動に対する母語話者の評価」『第二言語としての日本語の習得研究』3、pp.19-35
- 井上佳朗 (1994) 「対人印象に及ぼす背景の効果」『鹿児島大学法文学部人文学科論集』40、pp.1-32
- 大橋正夫・平林進・長戸啓子・吉田俊和・左伯道治 (1975) 「性格の印象評定における面接法と質問紙法」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』22、pp.83-101
- 小塩真司 (2004) 『SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 因子分析・共分散構造分析まで』東京図書
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中央公論社
- 小林ミナ (2000) 「『何を』教えるかの再吟味へー日本人評価研究の意義と限界ー」『北海道大学留学生センター紀要』4、pp.149-159

- 崔文姫 (2005) 『韓国人日本語学習者の言語・非言語に対する日本語母語話者の印象形成要因－異なる属性を持つ日本語母語話者の評価を通して－』東京都立大学 修士論文
- 崔文姫 (2007) 「日本語学習者の発話に対する日本人の評価－韓国人の日本語学習者に対する印象とその印象に影響を及ぼす要因－」『計量国語学』26-2、pp.47-63
- 崔文姫 (2009) 『日本語学習者に対する日本語母語話者の印象形成－学習者の発話に関する評価を基準に－』首都大学東京 博士論文
- 崔文姫 (2012a) 「留学生に対する日本人の評価－共分散構造分析に基づいた因果関係モデル－」『社会言語科学会第29回大会発表論文集』、pp.38-41
- 崔文姫 (2012b) 「日本語学習者に対する日本語母語話者の評価－共分散構造分析モデルに基づいて－」『人文学報』458、pp.23-48
- 崔文姫 (2012c) 「日本語学習者に対する母語話者評価の因果モデル－中級レベルと上級レベルの比較－」『韓国日本文化学会第43回国際学術大会論文集』、pp.86-92
- 豊田秀樹編 (2007) 『共分散構造分析[Amos編]－構造方程式モデリング－』東京図書
- 西郡仁朗 (1997) 「外国人と日本人の初対面会話の分析－数量的に見た特徴と印象の形成について－」『科研費報告書 日本人談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作 基盤研究C(2) (研究代表者：西郡仁朗)』、pp.58-74
- 野原ゆかり (2011) 「接触場面での日本語非母語話者の話しぶりに対する母語話者の評価－印象形成の要因を探る量的調査－」『社会言語科学会第28回大会発表論文集』、pp.32-35
- 林文俊 (1978) 「対人認知構造の基本次元についての一考察」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』25、pp.233-247
- 林文俊・大橋正夫・広岡秀一 (1983) 「暗黙裡の性格に関する研究 (I)－個別尺度法によるパーソナリティ認知次元の抽出－」『実験社会心理学研究』23-1、pp.9-25
- 原田朋子 (1998) 「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」『北海道大学留学生センター紀要』2、pp.157-167
- 渡部倫子 (2004) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価－評価尺度開発の試み－」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』52、pp.175-183
- Albrechtsen, D., Henriksen, B., and Faerch, C. (1980) "Native Speaker Reactions to Learners' Spoken Interlanguage", *Language Learning* 30:2, 365-396
- Okamura, A. (1995) "Teachers' and Nonteachers' Perception of Elementary Learners' Spoken Japanese", *The Modern Language Journal* 79, 29-40
- Thomas, J. (1983) "Cross-Cultural Pragmatic Failure", *Applied Linguistics* 4, 91-112

要 旨

日本語学習者に対する日本語母語話者の評価には、言語そのものだけではなく、学習者のパーソナリティも評価の対象として重視されることが明らかになっている。崔 (2012a, 2012b) は、パーソナリティ評価に、学習者の言語やパラ言・非言語能力がどの程度、どのように影響を与えるのかなどについての因果関係を検証し、評価研究の方向性を示した。本稿では、崔 (2012a, 2012b) が提案した母語話者評価の因果 (関係) モデルに基づき、日本語学習者を中級レベルと上級レベルに分けて、母語話者評価の因果関係を検証する。その結果、両レベルに共通して現れる因果関係および相関関係が明らかになり、また、学習者のレベルによって異なった因果関係があることが判明した。すなわち、母語話者が学習者を評価する際には、学習者の言語運用能力によって異なる判断基準を持ち、学習者の言語能力やパラ言語能力が、母語話者の学習者に対する『個人的親しみやすさ』『社会的望ましさ』『活動性』などのパーソナリティに大きく影響を与えることが明らかになった。具体的に言うと、中級レベルの学習者に対する評価については、『言語能力』と『話し手の方略』が『個人的親しみやすさ』に直接影響を与え、また『活動性』が『社会的望ましさ』に直接影響を与えており、この因果関係は上級レベルには見られない。一方、上級レベルの学習者に対する評価については、『言語能力』が『社会的望ましさ』や『活動性』に直接影響を与え、また『話し手の方略』が『パラ言語能力』に直接影響を与えており、この因果関係は中級レベルには見られない。さらに、両レベルの学習者において、『言語能力』から『パラ言語能力』へ正の直接効果が見られ、その『パラ言語能力』から『個人的親しみやすさ』『社会的望ましさ』『活動性』へ正のパスが得られた。また、『言語能力』と『話し手の方略』の間で負の相関関係があることも共通していることが判明した。

キーワード：学習者の発話、母語話者評価、因子分析、共分散構造分析、
因果 (関係) モデル、学習者レベル、言語能力、パラ言語、印象形成

투 고 : 2012. 11. 30
1차 심사 : 2012. 12. 15
2차 심사 : 2013. 1. 5